
地雷

酒井 真言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地雷

【Nコード】

N79600

【作者名】

酒井 真言

【あらすじ】

1980年代、アフガニスタン東部のパルヴァーン州、パシュトゥーン人の少女は水汲みの途中に、ソ連製破裂型地雷のPMN-？に出会う。

峻険なるヒンドウークシユの峰々は、冬の間ですっかり白く様変わり、透き通る青空の下雄大にそびえています。小高い丘はつつすらと緑に色づき、平地をきらびやかに潤す田畑には、点在する裸の梢が桃色に咲いています。アフガニスタンに春が訪れました。

目尻の垂れたパシュトゥーン人の少女が、山々の恩恵を汲みに小川へ向かう途中、石の転がる見晴らしの良い丘の上に、何やら円盤らしき物を見つけました。草々の中にぼつんとする深緑色の円盤は身の半分を土に隠し、中央に黒い十字を重々しくあらわにしています。緑の破裂型地雷です。少女は近づき、屈みこんでじっと見つめました。

「あなたはなあに？」少女は訊ねました。

地雷は返事をしません。

「あなたはなあに？」少女はさらに訊ねました。

地雷は何も返事をしません。

「あなたはなあに？」少女はもう一度訊ねました。

「わたしはPMN-？だ」地雷は答えました。

「ピイエムってなあに？」少女はさらにもう一度訊ねました。

「一九七九年製造、ソ連製破裂型地雷のPMN-?だ」地雷は答えました。

「地雷ってなあに？」少女は腕を組み膝頭ひざかじりにのせました。

「人間を傷つける兵器だ」地雷は言いました。

「兵器ってなあに？」少女は訊ねました。

「攻撃するための道具だ」地雷は言いました。

「手足がないのにどうやって攻撃するの？」少女は笑いました。

「爆発して損害を与えるのだ」地雷はむっとしました。

「なにが爆発するの？」少女は言いました。

「わたしだ」地雷は誇らしそうです。

「どうやって爆発するの？」少女は訊ねました。

「一定の圧力を加えることで、埋め込まれた火薬が爆発するのだ」地雷は言いました。

「圧力ってなあに？」少女はさらに訊ねました。

「おさえつける力だ」地雷は答えました。

「あなたはどうやって動くの？」少女は言いました。

「動くことはできない」地雷は答えました。

少女は地雷に手を伸ばしました。

「さわるな！」地雷は怒鳴りました。

少女は笑いながら手を引っ込めました。

「何回爆発できるの？」少女は首を傾げました。

「一回だけだ」地雷は言いました。

「一回で終わりなの？」少女はきょとんとしています。

「終わりだ」地雷は言いました。

「爆発したらあなたはどうなるの？」少女は訊ねました。

「木っ端微塵だ」地雷は言いました。

「死んじゃうの？」少女は目を丸くしています。

「もちろんだ」地雷は答えました。

「怖くないの？」少女は訊ねました。

「考えたこともない」地雷は言いました。

「わたしを攻撃したい？」少女は言いました。

「わたしの攻撃対象ではない」地雷は答えました。

「だれを攻撃したいの？」少女はうれしそうです。

「武器を持った戦士だ」地雷は言いました。

「わたし今武器を持ってるよ」少女は持ってきた水甕みずがめを指差しました。

「それは武器ではない」地雷は言いました。

「うっん、武器だよ」少女は笑いました。

「ふざけるな！」地雷は大きな声で怒鳴りました。

「どこからやって来たの？」少女は腕にあごをのせました。

「ソ連だ」地雷は偉そうに言いました。

「動けないのにどうやって来たの？」少女は訊ねました。

「ソ連兵に運ばれて来た」地雷は答えました。

「いつ来たの？」少女はさらに訊ねました。

「去年の秋だ」地雷は言いました。

「父さんも母さんも姉さんも兄さんも村の人達も、みんなみんなソ連兵を嫌っているよ」少女は早口に言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「アフガニスタンを踏みにじる最悪の連中って言ってるよ」少女はさらに言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「わたしもソ連兵が嫌い」少女はそっけなく言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「でもあなたは嫌いじゃないよ。一人ぼっち置きざりにされてかわいそう。おさえつけられたら爆発しちゃうかわいそう。人を傷つけて死んじゃうなんてかわいそう」少女は泣いてしまいました。

「わたしの知ったことじゃない。それに人間を傷つけるのがわたしの仕事であり、わたしが存在する唯一の理由だ」地雷ははっきり言いました。

「やっぱりかわいそう」少女はつぶやきました。

「かわいそうではない。不幸なのだ」地雷は教えるように言いました。

目尻の垂れたパシュトゥーン人の少女は、緑の破裂型地雷と友達になりました。少女は怒られるのが嫌なので、家族の者にも村の者にも、地雷のことは話しませんでした。少女は水を汲みに行くたびに、地雷とたわいもない話をするようになりました。

太陽が地を照りつけ、空気の乾燥した強烈な暑さが続きます。ア
フガニスタンに夏がやってきました。

「昨夜弟が生まれたの」少女は屈みこんで言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「こんなに小さいのよ」少女は手を使って大きさを示しました。

「恐ろしく小さいな」地雷は驚きました。

「あなたも生まれた当時は小さかったの？」少女は訊ねました。

「わたしは今と変わらない」地雷は答えました。

「これから大きくなるの」少女はさらに訊ねました。

「わたしはこれからも変わらない」地雷は答えました。

「なんで？」少女はいぶかしげに言いました。

「変わらないからだ」地雷は言いました。

「わたしはあなたと会ってからすこし大きくなったよ」少女はうれ
しそうに言いました。

「わたしは変わらない」地雷は言いました。

「大きくなりたい？」少女は訊ねました。

「考えたこともない」地雷は言いました。

「初めて会った時よりも小さくなったように見えるよ」少女は言いました。

「そんなはずがあるか」地雷はむっとしました。

「ほんとだよ」少女は地雷に手を近づけて計る真似をしました。

「近づくな！」地雷は怒鳴りました。

少女は笑いながら手を引っ込めました。

「小さくなればいいのにね」少女は言いました。

「なぜだ？」地雷は訊ねました。

「みんながあなたを踏みはずすから」少女は言いました。

「それではわたしの仕事が遂行できない」地雷はむっとしました。

「爆発が小さくなるから」少女はさらに言いました。

「それではわたしの仕事量が少なくなる」地雷はさらにむっとしました。

「ねえ、弟がかわいいの」少女はうれしそうに言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「アフガニスタンを守るたくましい男に育てるよ」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「ソ連兵をやつつけるたくましい男に育てるよ」少女はさらに言いました。

「武器を持たない男に育てる」地雷ははっきりと言いました。

「ソ連を倒して、あなたのような兵器を生まないようにさせるよ」少女はなおも言いました。

「武器を持たない男に育てる」地雷ははっきりと言いました。

朝晩の寒さが募り、木の葉は力なく散ります。アフガニスタンに秋がやってきました。

「昨日小麦の種蒔きが終わったよ」少女は屈みこんで言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「来年はきつと豊作だよ」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「また厳しい冬がくるね」少女は元気な声で言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「冬への準備は終わったの？」少女は訊ねました。

「準備など必要ない」地雷は偉そうに言いました。

「何もしないの？」少女はさらに訊ねました。

「何も必要ない」地雷は言いました。

「何も出来ないの？」少女は意地悪く言いました。

「何もする必要がないのだ」地雷はむっとしました。

「前の冬はどうやって過ごしたの？」少女は首を傾げました。

「ここにいた」地雷は言いました。

「ここ雪に覆われていたよ？」少女は言いました。

「雪の中にいた」地雷は言いました。

「風邪ひかない？」少女は訊ねました。

「考えたこともない」地雷は言いました。

「寂しくない？」少女はさらに訊ねました。

「考えたこともない」地雷は言いました。

「これをわたしだと思って寒さをしのいで」少女は頭を包んでいた
紅梅色のスカーフをはずし、地雷に覆いかけようと思いました。

「近づくな！」地雷は怒鳴りました。

少女は笑いながら手を引つ込めました。

「強がりね、わたしの兄さんみたい」少女はスカーフを戻しました。

「強がりではない。必要ないのだ」地雷は言いました。

「わたしの兄さんは凧揚げが得意なの」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「鳥もたまげる動きで空を翔るの」少女はうれしそうに言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「カプールの誰にも負けないって言うの」少女はさらにうれしそうです。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「わたしも兄さんの凧が一番だと思う」少女は言いました。

「凧とはなにものだ？」地雷は訊ねました。

「風に乗って空を翔る道具よ」少女は誇らしげに言いました。

「戦闘機か？」地雷はさらに訊ねました。

「あはは、違うよ」少女はうれしそうに笑いました。

「ではなんだ？」地雷はむっとしました。

「遊び道具よ」少女は言いました。

「くだらん」地雷は言いました。

「アフガニスタンの空は凧が似合うの」少女は空を見上げて言いました。

「わたしには必要ない」地雷は言いました。

「兄の凧がソ連の戦闘機を打ち落とせばいいと思う」少女は目を細めて言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

凍てつく冬を越えて、甦よみがえる春がきました。

「小麦がすくすくと成長しているよ」少女は屈みこんで言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「ねえ、弟がかわいいの」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「元気に成長しているよ」少女はうれしそうに言いました。

「武器を持たない男に育てろ」地雷ははっきりと言いました。

「ソ連兵が活動を再開したみたい」少女は膝頭にあごをのせました。

「関わるな！」地雷は激しく言いました。

「春はうれしいけど、戦闘が始まるから嫌だ」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「兄さんがムジャーヒディーンに参加するの」少女は言いました。

「やめておけ」地雷はむっとしました。

「父さんも姉さんも村の人達も、みんなみんな喜んでるの」「少女はさらに言いました。

「やめておけ」「地雷はさらにむっとしました。

「わたしも兄さんがソ連兵と戦うのがうれしいの」「少女は笑いしました。

「地雷に気をつける」「地雷は力をこめて言いました。

少女は地雷に腕を伸ばしてなでようと思いました。

「さわるな!」「地雷は怒鳴りました。

少女は笑いながら腕を引っ込めました。

「でも母さんだけは泣いているの」「少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」「地雷は言いました。

「明日は親戚一同でピクニックに行くの」「少女は目を大きく開きました。

「それはなによりだ」「地雷は言いました。

「プラムの樹の下で食事するの」「少女は言いました。

「戦闘機に気をつける」「地雷は力をこめて言いました。

「明後日から兄さんとすこしの間お別れなの」「少女は言いました。

「地雷に気をつける」地雷は力をこめて言いました。

「あなたも一緒に行く？」少女は訊ねました。

「わたしには必要ない」地雷は言いました。

「あなたにさわれたらいいのに」少女は言いました。

「考えたこともない」地雷は言いました。

夏がきました。

「村のお姉さんが地雷を踏んだの」少女は屈みこんで言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「太ももから下が失くなっちゃったの」少女は目を細めて言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「村はずれで薪「まき」を拾っていたら踏んだらしいの」少女は言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「あなたも同じ地雷なの？」少女は訊ねました。

「わたしも地雷だ。だが同じ種類の地雷かわからない」地雷は言いました。

「わたしがあなたを踏んだら足は失くなる？」少女はさらに訊ねました。

「木っ端微塵だろう」地雷は偉そうに言いました。

「あなたって本当は恐ろしい兵器なのね」少女は腕を組んで膝頭へのせました。

「当然だ」地雷はさらに偉そうです。

「お姉さんひどい声で泣いてた」少女は顔をしかめました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「家族もみんな泣いてた」少女はさらに顔をしかめました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「なんで戦士でもない村人を襲うの？」少女は訊ねました。

「踏んだからだ」地雷は言いました。

「戦士の時だけ爆発すればいいじゃない」少女は言いました。

「それは無理だ」地雷は言いました。

「なんで？」少女は大きな声を出しました。

「踏んだら無差別に爆発するからだ」地雷ははっきりと言いました。

「なんであなたみたいなの恐ろしい兵器がこの世にあるの？」少女は訊ねました。

「戦争があるからだ」地雷は言いました。

「なんで戦争があるの？」少女はさらに訊ねました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「あなたを嫌いになりそう」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「わたしソ連兵が大っ嫌い」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「小麦は立派に育ったよ」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

秋になりました。

「ソ連兵を多く見かけるの」少女は屈みこんで言いました。

「関わるな！」地雷は激しく言いました。

「カブールへ向かう道を装甲車の上に乗って通るの」少女は言いました。

「関わるな！」地雷はさらに激しく言いました。

「たまに村の近くで戦車を見かけるの」少女はさらに言いました。

「関わるな！」地雷はより激しく言いました。

「わたしソ連兵が大っ嫌い」少女は顔をしかめました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「全員ムジャーヒディーンに殺されてしまえばいいのに」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「村の多くの男の人がムジャーヒディーンになったよ」少女は言いました。

「地雷に気をつける」地雷は力をこめて言いました。

「世界中から人が集まり、ムジャーヒディーンが増えるらしいの」少女は誇らしげに言いました。

「地雷に気をつける」地雷は力をこめて言いました。

「父さんも『ジハードだ！』と言って戦いたがっているの」少女は

言いました。

「やめておけ」地雷は言いました。

「姉さんも」少女はさらに言いました。

「やめておけ」地雷は言いました。

「でも畑仕事があるからって父さんは悔やんでいるの」「少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「姉さんも『男に生まれたかった』と嘆いているの」「少女はさらに言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「わたしも男に生まれたかった」少女はあごを膝頭にのせました。

「やめておけ」地雷は言いました。

「わたし早く結婚して男の子をたくさん産むの」「少女は言いました。

「それはなにによりだ」地雷は言いました。

「ヒンドウクシユのようなたくましい男に育てて祖国を守らせるの」「少女は目を大きく開きました。

「武器を持たない男に育てろ」地雷ははっきりと言いました。

「ねえ、弟がかわいいの」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「一昨日初めて立ったの」少女はうれしそうに言いました。

「地雷に気をつける」地雷は力をこめて言いました。

少女はうれしそうに地雷に腕を伸ばしました。

「さわるな！」地雷は怒鳴りました。

少女は笑いながら腕を引っ込めました。

「小麦の種蒔きは終わったよ」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

冬が過ぎて春になりました。

「また戦闘が始まるよ」「少女は屈みこんで言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「アフガニスタンはソ連なんかを決して負けない」少女は力強く言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「明日から学校が始まるの」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「家の仕事があるから行くなと母さんが言っの」少女は言いました。

「当然だ」地雷は言いました。

「なぜか父さんは学校に行けと言っの」少女は言いました。

「不思議だ」地雷は言いました。

「ふふ、あなたもそう思うでしょ？」少女は笑いました。

「当然だ」地雷はむっとしました。

「わたし勉強が楽しみ」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「でも校舎が破壊されたから空の下で授業を受けるの」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「ヘリコプターをよく見かけるの」少女は目を細めました。

「機関銃に気をつける」地雷は力をこめて言いました。

「アフガニスタンの空にヘリコプターは似合わない」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「村の男の子が凧を揚げていて撃ち殺されたの」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「わたしソ連兵が大っ嫌い」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

夏がきました。

「カブールからの帰り道に父さんが地雷を踏んだの」「少女は屈みこんで言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「右足の膝から下を失ったの」「少女は泣いていました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「病院のベッドの上で苦しそうに呻うめいているの」「少女は顔をしかめました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「『ソ連兵を皆殺しにしてやる!』と叫び散らすの」「少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「『ひとおもいに殺さず、なんて屈辱な体で生かすのだ!』と叫ぶの」「少女は言いました。

「兵力をより削ることができるからだ」地雷は偉そうに言いました。

「『地雷はこの世で最も卑劣な兵器だ!』と罵ののしっていたの」「少女はさらに泣きました。

「同感だ」地雷は言いました。

「『姿を隠して無差別に攻撃する最も臆病な兵器だ!』と叫んでい

たの「少女は言いました。

「同感だ」地雷は言いました。

「あなたはなんで姿を隠さないの？」少女は訊ねました。

「ソ連兵が手を抜いたからだ」地雷は言いました。

「あなたはまぬけなのね」少女は言いました。

「ソ連兵がまぬけなのだ」地雷はむっとしました。

「あなたを踏む人はいるのかな？」少女は言いました。

「だれかしら踏むだろう」地雷は言いました。

「たぶんいないよ」少女はさらに言いました。

「だれかしら踏むだろう」地雷はむっとしました。

「だれにも踏まれないでね」少女は首をひっこめました。

「それではわたしの生まれた意味がない」地雷ははっきり言いました。

「わたしもう学校行かない」少女は言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「父さんの分まで働かなきゃ」少女は泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「早く弟が育って欲しい」少女は言いました。

秋になりました。

「兄さんが戻ってきたの」少女は屈みこんで言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「カブールはひどく荒れているらしいの」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「兄さんが小麦の種蒔きを手伝ってくれたの」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「それで父さんがひどく怒っているの」少女は笑いました。

「不思議だ」地雷は言いました。

「『畑仕事にかかざらうぐらいなら、一人でも多くソ連兵を殺せ！』
って言うの」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「父さん杖を振りまわすの」少女は言いました。

「不思議だ」地雷は言いました。

「兄さん来年の春まで家の仕事を手伝うの」少女はうれしそうです。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「母さんがとても喜んでいるの」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「弟が言葉を話せるようになってきたの」少女は言いました。

「わたしの知ったことではない」地雷は言いました。

「ちゃんと礼拝もするのよ」少女は言いました。

「わたしの知ったことではない」地雷は言いました。

「冬がはじまるね」少女は笑いました。

「当然だ」地雷は言いました。

「すこしの間アフガニスタンも静かになるね」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「カブールに恵みをもたらす雪がヒンドウークシュに降り積るね」少女は言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

再び春が訪れました。

「兄さんが死んだの」少女は屈みこんで泣きました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「カブールで傷を受けて病院にいた時なの」少女は言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「病院がミサイルに狙われたらしいの」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「胸から上が失^なくて兄さんに見えなかった」少女は泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「もう兄さんの風揚げは見られない」少女はさらに泣きました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「ソ連兵が憎らしい」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

猛暑の夏が襲いかかりました。

「早魃^{かんぱつ}がひどいの」少女は屈んで言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「今年は雪が少なかったみたい」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「小麦が不作なの」少女は泣きました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「川の水が干上がりそう」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「戦闘が激しくなったの」少女は腕を組んで膝頭にのせました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「村の人々が嘆いているの」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「ソ連兵をよく見かけるよ」少女は目を細めました。

「関わるな！」地雷は激しく言いました。

「秋が近づいたら姉さんが結婚するの」「少女はうれしそうに言いました。

「それはなによりだ」地雷は言いました。

「幸せになつて欲しい」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「たくましい男の子を生んで欲しい」少女はさらに言いました。

「武器を持たない男に育てろ」地雷ははっきりと言いました。

秋になりました。

「姉さんが死んだの」少女は屈みこんで泣きました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「結婚したばかりなのに」少女はさらに泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「水汲みの途中に地雷を踏んだの」少女はにらみました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「水色のブルカは穴だらけで真っ赤に染まっていたの」少女はさらににらみました。

「それは破片型地雷だ」地雷は偉そうに言いました。

「あなたと違うの？」少女は訊ねました。

「種類が違う」地雷は言いました。

「どう違うの？」少女はさらに訊ねました。

「わたしは爆発するだけだ。あいつはさらに破片をとばす」地雷は

答えました。

「人を傷つけるには変わりないよ」少女はにらみました。

「同感だ」地雷は言いました。

「早魃のせいで食べ物がないの」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「家畜が盗まれて畑が耕やせないの」少女はさらに言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「ソ連兵も嫌いだけど、地雷も嫌い」少女は泣きました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

戦闘開始の春がきました。

「村の礼拝堂が破壊されたの」少女は屈みこんで言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「みんな礼拝中だったの」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「絶対に許せない」少女は泣きました。

「関わるな！」地雷は激しく言いました。

「父さんが畑仕事をやめてムジャーヒディーンになったの」「少女は言いました。

「やめておけ」「地雷は言いました。

「父さんを誇りに思う」「少女はさらに言いました。

「わたしの知ったことじゃない」「地雷は言いました。

「弟も育つてきてる」「少女は言いました。

「武器を持たない男に育てろ」「地雷ははっきりと言いました。

「アフガニスタンを汚す^{けが}ソ連兵を皆殺しにさせるの」「少女はにらみ
ました。

「武器を持たない男に育てろ」「地雷ははっきりと言いました。

過酷な夏がやってきました。

「弟が死んだの」「少女は泣き崩れました。

「それは残念だ」「地雷は言いました。

「小麦畑で遊んでいた時なの」「少女は言いました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「ヘリコプターから何かばら撒まかれたの」少女は言いました。

「関わるな！」地雷は激しく言いました。

「弟がそれにさわったらしく突然爆発したの」少女は狂ったように泣きました。

「それは空中散布式地雷だ」地雷は偉そうに言いました。

「また地雷なの？」少女はにらみました。

「そいつは地に隠れず、堂々と姿を現して興味を引くのだ」地雷は言いました。

「なんでそんな物がこの世にあるの？」少女は激しくにらみました。

「戦争があるからだ」地雷は答えました。

「なんのためにわたし達みたいな村人を狙うの？」少女は激しく泣きました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「手足が溶けて、顔がなかったわ」少女はさらに泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「地雷は最悪よ！」少女は泣きました。

「同感だ」地雷は言いました。

戦闘激しい秋になりました。朝方、眼光鋭いパシウトウイン人の少女は、川で水を汲んでから、丘の上に臥す緑の破裂型地雷と話をしました。

「父さんが死んだわ」少女は屈みこんで泣きました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「戦車に吹き飛ばされたらしく、粉々だった」少女はさらに泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「父さんは立派よ」少女は力をこめて言いました。

「当然だ」地雷は言いました。

「母さんが倒れたの」少女はうつむきました。

「それは残念だ」地雷は言いました。

「横になったきりうわ言が絶えないの」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「親戚の人がパキスタンへ逃げようと誘うの」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「母さんは気がおかしくなったと言っの」少女は泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「わたしはそうは思わない」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「母さんを置いて行けない」少女は激しく泣きました。

「当然だ」地雷は言いました。

「冬を母さんと二人で耐えようと思っの」少女は言いました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「でも食べ物が無いの」少女は泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「ムジャーヒディーンが村から奪っていったの」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「畑は爆撃で穴だらけなの」少女はさらに言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「家畜は全部奪われたの」少女は膝頭にあごをのせました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「ソ連兵もムジャーヒディーンも、地雷も大っ嫌い！」少女は立ち上がりました。

「わたしの知ったことじゃない」地雷は言いました。

「わたし村に戻る。さようなら。踏まれなくてね」少女は村へ歩き出しました。

「それではわたしの生まれた意味がない」地雷ははつきり言いました。

空を赤く染める夕方、眼光鋭いパシュトウーン人の少女は、丘の上に臥す緑の破裂型地雷のもとへやってきました。

「村の人間が一人残らず死んでいたの」少女は泣き崩れました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「わたしが水汲みに行っている間にソ連兵に襲われたらしいの」少女はさらに泣きます。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「変わり果てた死体がそこら中に、とてもむごいようすだった」少女は言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「母さんも死んでいたの」少女はわっと泣きました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「ブルカが破り捨てられ、股から血を流して腹を引き裂かれていたの」少女は震えました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「顔は穴だらけだった」少女は嘔吐おとしました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「わたしもう生きていけない」少女は声を震わせました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「あんな母さん見たら、もう一人でいられない」少女はがたがたと震えました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「怖い！ もう生きているのが怖い！」少女は強烈に震えました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「ねえ、あなたわたしを殺せるでしょ？」少女は訊ねました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「地雷は人を傷つけるために生まれたんでしょ？」少女はさらに訊ねました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「わたしを助けて！」少女は地雷に近寄りました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「あなたは必ず誰かを傷つけるんでしょ？ じゃないと死ねないんでしょ？」少女はひきつった声で叫びました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「わたしがあなたを殺してあげるから、わたしを殺して！」少女は笑いながら叫びました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「あなたを助けてあげる、だからわたしを助けて、ねっ、一緒に死のうよ！」少女はうれしそうに言いました。

「悲惨だ」地雷は言いました。

「どうすればいいの？」少女は微笑みながら地雷に顔を寄せました。

「わたしを枕にして眠るか、わたしに激しく口づけしろ！」地雷は

激しく怒鳴りました。

夕闇重なる空の下、響く爆発音と共に宙高く吹き飛びました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7960o/>

地雷

2010年11月12日13時13分発行